

フローインジェクション分析研究懇談会事務局 10 年の流れ



岡山大学大学院自然科学研究科（理学）

大島 光子

事務局の担当が終わり、肩の荷を下ろしたと思ったら、2005 年度第 46 回フローインジェクション講演会（高知）の編集委員会で編集委員に推薦され、さらにその場で早速この巻頭言を書くようにとの身に余る光栄な依頼をいただいた。気を抜かないようにとのご配慮と感謝し、本フローインジェクション分析研究懇談会のここ 10 年余りを事務局担当の目を通して振り返ってみたい。

1994 年度に委員長が大倉洋甫教授から本水昌二教授に引き継がれたのに伴い、事務局が岡山大学に回ってきた。コンピューターでの住所管理等がやっと普及し始めたころであったと思う。私はまだ使いこなせてなく、ワープロで文書を作成するのが精一杯だった。その頃は会員管理、会計と委員会のお世話が主な仕事であり、最初は分析化学会本部へ提出する会計報告書類の書き方がさっぱり分からなかった。本研究懇談会誌 J.FIA は Vol.11, No.1 (1994) から発行を担当した。といってもこの頃は J.FIA の印刷はすべて外部の業者委託で、ページなどのチェックと支払いが事務局の主な仕事であった。Vol.11, No.1 を紐解いてみると、巻頭言は Prof. G.D.Cristian と新委員長の本水教授で、Cristian 教授の内容は 1993 年に名古屋工大で開催された第 20 回フローインジェクション講演会（石橋信彦先生追悼記念講演会）で講演されたものであった。お知らせには上野景平先生と中川元吉先生の訃報、論文審査制が本号から始まったことなどが載っており、改めて月日の流れの速さを感じる。Vol.13, No.1 から印刷、発送等すべてを事務局が担当することになり、論文は編集委員長任せであったが、それ以外の広告掲載や会員名簿などの準備が大変であった。広告の版下も大きな写真原版の郵送から、最近では PDF ファイルをメールで送ってもらうようになった。当時の編集委員長の酒井忠雄教授の提案で Vol.17 からは A4 版になった。そのおかげで段組を覚えた。毎年 ICFA に参加するようになった効果からか、だんだん外国からの投稿が増え、英語の論文誌かと思まがうような号もあった。学会情報は Vol.1 から、Bibliography は Vol.2 からずっと続けて掲載されており、「ぶんせき」誌に進歩総説を書くよう依頼されたときは大変役立った。Bibliography の件数の急激な増加は FIA の汎用性と将来の応用分野の広がりを約束する証であると思う。また、論文誌の発行を続けている研究懇談会はなく、この点は分析化学会でも評価が高いと聞いている。

会員数は特別賛助、賛助会員を合わせ 200 名前後である。毎年開催される講演会の参加者数はほぼ 70 名程度、最近毎年開催されている講習会は 15, 6 名前後で、参加者全員が顔見知りになれ、自由にディスカッションができるほどよい規模である。また、関連会社の協力が非常に大きく、装置を手作りすることも多い FIA の分野では強力な相談相手である。

曲がりなりにも事務局担当の役目を果たせたのは、委員をはじめ会員の皆様の暖かいご支援の賜と感謝しています。この場をお借りして、厚くお礼を申し上げます。

今、本研究懇談会は第 3 世代への交代時期に入っていると思われ、何事にも積極的な若い研究者たちが引っ張っていってくれるようになってきた。独自のネーミングが可能なシステム開発、装置や試薬消費量のマイクロ化、コンピューター制御自動化、流れを利用する多彩な試料導入法などなど、ますます FIA が多方面へ枝を伸ばし、発展することを楽しみにしています。